

原子力の安全と安心をみんなで作ろう

しーきゅうぶ東海村



特定非営利活動法人 (NPO) HSE リスク・シーキューブ 東海村支部 広報誌 (年4回発行)

原子力安全と住民パワーの可能性 東海村長 村上達也

30年前に読んだ本に、小松真人著「^{りょじん}虜人日記」というものがあった。著者は酒精技術者で軍属としてフィリピンで米軍の捕虜となり、その体験を抑留中に綴った、それがこの本である。彼はこのようなことを言っている。日本兵とアメリカ兵を比較すると、平均してアメリカ兵は知識では日本兵に劣るが教養では勝る、日本は負けるべくして負けたと。著者が言う教養とは何か、定かではないが人間性(品性・品位)ということか。このくだりは強い印象として残った。戦時中の日本社会、あの戦争全体の流れをみると得心できる。殆どの日本人が軍国主義体制下で軍に魂を抜かれてしまっていた。日本軍は組織維持が自己目的化し「軍あって国民なし」の組織だった。

戦後60年、私たちは小松氏が感得した教養を身につけただろうか。今もって人間より組織優先の意識が強くはないか。自分の利益、幸福を会社等の帰属集団(組織)の存続と一体化していないか。人類の英知をもって長足の進歩を遂げた原子力の世界も例外でないものを感じる。曰く「^{いわ}原子力のムラ」という世界。

原子力科学は20世紀の最高位の科学、しかもなお進歩し続けて止まない科学であり人間生存の^{きすう}帰趨を制している。であるからこの世界では組織集団の利益が人間存在の上位にあっては困る。原子力安全という課題は、この人間(住民)の存在を意識することが出発点であるべきである。同時に人間(住民)は「原子力のムラ」に風を吹き込み続けねばならない。こうして初めて巨大科学技術原子力の安全が保たれるのではないかと思う。

このような意味から HSE リスク・シーキューブが NPO として原子力発祥の地、東海村に住民が主体となって誕生したことは画期的であり、非常に意義深い。志は高く、積極的な活動、発展を期待して止まない。

第1巻 第2号(冬)

2006年1月18日発行

巻頭言・コラム	1
視察報告「総合防災訓練」	2～4
原子力マップ・旧跡を訪ねて	5
HSE リスク C ³ の動き	6
しーきゅうぶ東海村活動報告	7
会員募集・活動予定・後記	8
ふろく 新聞記事クリップ	

表紙題字 山口歓一



むらかみ たつや

小松真人著「虜人日記」は岩波現代文庫で読むことができます。一読をおすすめします。

NPO法人の認証と今後の活動

NPO しーきゅうぶ東海村代表 佐藤隆雄(白方在住)

HSE リスク・シーキューブは内閣府よりNPO法人の認証を得、活動を開始しました。

現在正会員、活動会員などを含めて35名の会員が参加しています。今回の認証を機会に会員数を増やし、安全で安心できる原子力施設との共存社会を作るために、現時点では地に足の着いた活動としていくことが最も重要だと思います。東海村支部では視察、会員拡大と広報の三つのグループの活動をより進化させ、本部との連携を強化して活動を一層発展させていきたいと思っています。皆様の一層のご協力をお願いいたします。

平成 17 年茨城県原子力総合防災訓練視察（第三者評価実施）

2005 年 9 月 30 日（金）午前 8 時～午後 2 時 30 分

視察参加者：8 名

JCO 臨界事故から 6 年目にあたる 9 月 30 日、今年も県と共に東海村で原子力総合防災訓練が実施された。

今回の訓練は、海岸沿いの「御三家」ではなく、村の内陸部の核燃料製造加工施設を対象事業所とし、臨界事故を想定したことが特徴である。

そこでの初期対応能力向上や関係機関相互の連携強化、住民の安全確保と防災意識の啓発等を目的に実施された。



避難所前で検査を待つ子どもたち

訓練参加者の総合評価

1 昨年指摘して改善された点

- ・対策本部の登庁時間を繰り上げない、本部の設営を完全に行なわないなど「訓練のための訓練」にならない工夫がなされた。
- ・避難所への誘導にパトカー先導がなされた。
- ・放送内容は計画通りで、無用の混乱を招くことはなかった。
- ・第三者評価のしくみが取り入れられた。

2 昨年指摘したが改善されなかった点

- ・対策本部立ち上げに工夫がなされたものの、シナリオ通りの訓練であった。対策本部員は予定時間を待っている状態であった。班同士や外部との連絡もほとんどないためか、問題点を体験できる訓練にはなっていない。
- ・避難所としての設備の整っていない場所（体育館）への避難訓練であったため、参加者にはほとんど情報が伝わらなかった。



村の災害対策本部

- ・飲料水の配布は 1 2 時前でやや遅く感じた。避難所到着と同時に渡すなど、健康に対する配慮は内容や体制を更に検討していく必要がある。

3 今年度の訓練のポイントの成果

①初動体制

対策本部をあらかじめ説設営しないなどの実務的な工夫がなされた点は評価できる。また、県や近隣地域と意思決定をするためのテレビ会議訓練が行なわれたことも現実的訓練に一步近づいた。ただし、外部との連絡もとらず「待っていた」職員も多くいた。

②区長による指示・誘導

村職員よりも住民の状況を把握している区長や民生委員が重要な役割を果たすことが試みられたことは地域社会の力を活用した防災訓練の第一歩として評価できる。残念ながら、区長や民生委員の役割が明確でなく、最終参加者リストも届いていない、事態の進展状況を知る方法がないなど問題も残った。来年度から予定されている自治会組織移行に伴う、防災体制を検討すべきである。

③防災教育の実施

実施自体は評価できるが、さらに効果的なものにすべきである。特に、防災教育は、事業所や専門家に任せるのではなく「村」が目的を明確にして主体的に取り組む必要がある。また、希望者を募って、住民間の議論の場を設けることも有効と考える。

改善提案

住民の安全・安心につながる防災訓練に向け、以下を提案する。

(1) 情報システムの強化と情報の共有化

対策本部内の全体の動きを見て第一に感じたことは情報の収集、必要な部署との情報共有が不十分であること。電子的に情報が収集できる仕組みや、役場の外の職員や消防隊員、避難所等との連絡手段を確立する。さらに既存の防災情報システムの積極的活用を図る。

(2) 避難先での防災学習

訓練に参加する人は、年齢層も経験もさまざまであり、すべての人に満足してもらう教材・資料を作ることは困難であるが、村民が何を求めているか、何を提供すべきか、村として真剣に考える必要があると思う。

原子力という難しい内容を理解してもらうためには映像以外の東海村独自の説明ツールの開発が必要である。防災について住民同士議論するなどの工夫が必要と感じた。

(3) 訓練に参加しない住民に対する教育啓蒙

今までに訓練に参加した住民の累積は10%に満たない。このままでは訓練に参加したことのない住民は、災害発生時パニック状態に陥る可能性が無視できない。

そこで、訓練に参加していない住民に訓練当日近くのコミセンに集ってもらい、事故時の心得などを学習してもらうことを提案したい。使用教材はJCO事故の原因がわかるような模型を用いたりすると有効と思われる。

(4) あらかじめ整備する事項の見直し

原子力災害時の水道取水設備隔離基準のようにあらかじめ整備しておくべき点について、新しい知見に基づく見直しと点検を常に実施すべきである。



住民の避難状況報告を受ける輸送班

(5) 実践的な訓練に向けた取り組み

これまでの防災訓練はシナリオ通りに進めることが中心で、現実には災害が発生した場合の問題点を顕在化させ、把握することはできていないのではないかと。

現状の防災訓練とは別に、村として以下の検討をすることを提案する。

①長期間避難の場合

宿泊場所、寝具、食料、水、自治組織

②様々な避難者の受け入れ

乳児と母親、外国人、病人、高齢者

③人数と受け入れ体制

1000人以上の場合の避難所と体制

④住民の確認方法

常会に加入していない住民の確認方法と仕組み
これらの課題を検討するため、机上訓練を実施し、どのような問題が発生するかあらかじめ予測しておく必要がある。



避難所内の様子

住民の知恵をかたちに！

－原子力防災訓練第三者評価をお願いして－

東海村経済環境部原子力対策課長 石澤 通

今回の訓練の大きな試みのひとつとして、第三者評価の導入があった。第三者評価導入のねらいは、訓練当事者のみならず、原子力や防災の専門家、村民の代表など様々な第三者の視点で訓練のありようを評価し、より実効性ある防災体制の構築を図ることにある。東海村の原子力防災訓練においては、従前から訓練参加者の反省点を取りまとめ改善に努めてきたところではあったが、昨年の訓練を参観された「しーきゅうぶ」からの提言を諒とし、今般の導入に至った次第である。

今回は、「東海村原子力安全対策懇談会」委員および「しーきゅうぶ東海村」会員のうちから若干名に評価していただいた。

評価結果は、指摘が当然と予想していたもの、ここまでの取組は困難と思われるもの、既に取り組んでいるにもかかわらず(我々の広報不足からか)取組みの必要を提言されたもの、そして正に第三者評価の成果と思われる幾つかのご指摘など、多種多様な評価内容であった。今後、これらのご提言をどう改善に結びつけていくか、評価者にも知恵をお借りしつつ検討して参りたいと考えている。



村へ評価報告書を提出（11月15日）
経済環境部長清水立雄氏に手渡す



避難時の推奨装備の一例

対策本部の訓練推移

- 8:20 事故の第一報が入る
- 8:25 三菱原子燃料から説明者2名が到着
- 8:35 対策本部要員の召集の庁内放送が入る
- 8:40 対策本部設置指示
- 8:52 原子力対策課長から事故状況説明が始まる
- 9:00 TV会議システムで県・市・村間の協議開始
- 9:10 住民避難が決定される
- 9:20 輸送班に指示がでる。防護服とマスクを身につける
- 9:39 役場に避難用バス約10台が待機。安全パトロール車に先導されて一時集合場所に向う
- 10:25 村長が避難所へ出発。対策本部長は教育長に
- 10:35 第2回対策本部会議を開催。輸送班からの避難報告が頻繁に入る
- 11:30 臨界終息の報告が入る
- 12:55 訓練終了。村長の訓練評価

訓練参加者の体験例

- 7:20 防災訓練実施の村内放送が聞こえる
- 8:42 訓練開始。臨界事故発生の放送
- 9:18 避難指示放送。午前8時20分三菱原子燃料で臨界事故発生。一時集合場所に集合指示
- 9:20 避難者、家を出発。約8分で一時集合場所に到着
- 9:42 消防隊員が要支援者を迎えに行き、連れてくる
- 9:50 バス到着。役場職員が参加者の確認をして9時53分に次の集合場所に向かう
- 10:10 避難所の体育館に到着。バスから降り、ドーム型チューブ膨張式エアテントで受付。被災地住民行動記録表を作成、順次身体表面汚染検査を行なう
- 10:55 原子力防災教育開始。村長挨拶、県知事挨拶。三菱原子燃料社員による会社概要と訓練を想定した事故の説明。緊急被ばく医療の説明、自衛隊の活動紹介、非常食の体験が行なわれた
- 13:10 訓練終了。バスに乗り一時集合場所に戻る

東海村周辺原子力事業所&旧跡マップ



- ① 日本原子力研究開発機構
原子力科学研究所
- ② 日本原子力研究開発機構
核燃料サイクル工学研究所
- ③ 日本原子力発電(株)
- ④ ニュークリア・ディベロップメント(株)
- ⑤ 東京大学大学院工学系研究科
- ⑥ 原子燃料工業(株)
- ⑦ (財)核物質管理センター
- ⑧ 三菱原子燃料(株)
- ⑨ (株)ジェー・シー・オー
- ⑩ 住友金属鉱山(株)
- ⑪ 日本照射サービス(株)
- ⑫ 第一化学薬品(株)
- ⑬ 三菱マテリアル(株)
環境・エネルギー研究所
- ⑭ 日本原子力研究開発機構
那珂核融合研究所

旧跡をたずねてー東海村再発見（照沼地区）

本年9月の茨城県原子力総合防災訓練の避難場所が東京電力(株)常陸那珂火力発電所の「ふれあい広場」体育館だったので、これにちなみ火力発電所から1～2kmの範囲の照沼地区を、自転車を利用して逍遙することにした。

取材班は快晴の11月8日(火)午前10時に村松虚空蔵堂前で落ち合い、虚空蔵堂参詣、三重塔や村松晴嵐の碑見学、村松大神宮参拝などを行った。平日のためか、我々以外には訪れるもののいない小径の落葉を踏みしめながら、大神宮から村松海岸への出口へ至る。森を出た途端、眼前に日本原子力研究開発機構の大強度陽子加速器(J-PARC)建設中の塀が迫り、海岸への道(八間道路)は2007年3月まで完全にシャットアウトされている。

虚空蔵堂境内で一休みして、11時20分頃如意輪寺(ア)へ向かう。途中の上り坂で若干の汗をかきながら約20分で到着。参詣後、東海村指定文化財の巨大なスタジイ(ブナ科)およびタブノキ(クスノキ科)を眺めた。とくに、スタジイは延暦10年(西暦791年)に坂上田村麻呂将軍が東征の際植えたものであることを知り、しばし当時を偲んだ。

如意輪寺の裏手から、火力発電所の地上230mの煙突「レインボータワー」(イ)が遠望され、今回の探訪を12時頃終えた。[寺西一夫]



菊まつりの村松虚空蔵堂



レインボータワー

HSE リスク・シーキューブの動き

NPO 法人設立後初の理事会を開催！

12月8日（木）14時～17時

出席理事：谷口・佐藤・土屋・小宮山・清水・木村

傍聴者：会員7名

活発に活動している「しーきゅうぶ東海村」のメンバーも発言し、参加。NPO 法人全体の活動と支部の活動との連携や協力のあり方について議論が行われました。

1) 活動および会計報告

設立総会以降の活動内容の概略と支出および収入の状況が報告されました。

2) 活動計画

①リスク勉強会の実施

理事の清水より、東海村中央公民館講座に原子力を知る講座を設ける提案が出され、採用条件などを調査の上「しーきゅうぶ東海村」で実施企画を検討することになりました。

②日本原子力発電株式会社よりの業務委託

副代表理事土屋より、日本原電広報室からの委託事業について説明がありました。これは、日本原電の広報パンフレットに、住民の目線を取り入れるというものです。出席者の間では、NPO 法人の最初の委託事業として適切な規模であり、実施すべきとの意見でまとまりました。（現在契約手続き中）

3) 東海村支部の視察活動の進め方

土屋より、核物質防護の強化や事業所の規模の問題から視察が実施しにくくなっている現状が報告されました。参加者より、「この団体の活動の原点は東海村内の事業所が何をやっているかを知る」ことであり、その情報を発信することが住民の安心につながるはずとの意見が出され、次の3項目が決められました。

①施設を公開したり、見学会を実施したりして
いるところから実施する

②旧日本原子力研究所の視察の方法を検討する

③見学ができない施設については事業内容を知る勉強会を行う



中丸コミュニティセンターでの理事会

4) 本部と支部の運営

①テレビ局や新聞社からの取材は、窓口を土屋とすること、取材にはできるだけ複数で応じることが決まりました。

②東海村支部のホームページ開設・運営方法を、情報提供グループを中心に議論することになりました。

③法人会員加入のお願いを1月には実施すること、法人会員には、業務委託の優先的实施、広報誌への掲載、広報誌の送付が決まりました。

懇親会（忘年会）も開催！

理事会に引き続き、場所を移して懇親会を開催しました。理事・会員合わせて14名が冬の味覚を楽しみながら、交流しました。

しーきゅうぶ 報道の記録

- ・毎日新聞（2005年9月27日朝刊）いばじん
「しーきゅうぶ東海村」代表 佐藤隆雄
主体的に動き「安心」実感
- ・NHK首都圏ニュース（2005年9月30日18時）
臨界事故から6年
- ・読売新聞（2005年10月1日茨城県版）
JCO 臨界事故から6年
早期避難重点に「訓練」
- ・朝日新聞（2005年10月1日茨城県版）
JCO 臨界事故6年 地元主導で避難
住民団体が第三者評価 東海村で初
- ・茨城新聞（2005年10月1日）
那珂市、初の住民避難
- ・NHK首都圏ニュース（2005年11月15日18時および20時50分）

しーきゅうぶ東海村活動報告

茨城 NPO フォーラム in つくばに参加しました！

10月28～29日、つくば市の筑波学院大学他を会場に「茨城 NPO フォーラム 2005 in つくば」が開催されました。茨城 NPO センター・コモンズの主催で、春の水戸に続いて行われたものです。県内外から約 200 団体が集まり、設立間もない「HSE リスク・シーキューブ東海村支部」から 2 名で参加。NPO 法人の仲間として暖かく迎えていただきました。環境・福祉・教育などに取り組む団体と情報交換し、互いに助け合える部分がたくさんあるのに気づかされました。

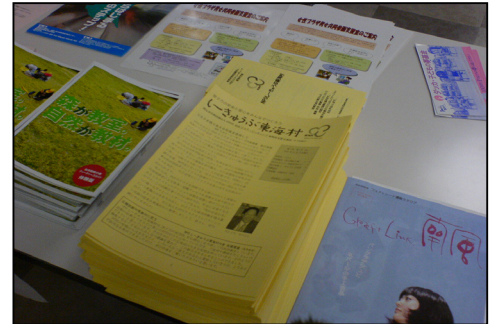
原子力ティータイムを開催して

10月20日(木)午後1時半より中丸コミュニティセンターで「原子力ティータイム」を開催しました。視察プログラムの報告会を兼ね、地域交流をめざした初めての試みです。前回視察した原子燃料工業(株)が報告テーマなので、近隣のみなさまの参加を期待しました。しかし、準備時間が不足していたため、お誘いした方はみなキャンセル。急遽コミセンで活動中の卓球サークルの5名の方に参加していただき、報告スライド上映と茶話会を行うことができました。ご協力ありがとうございました。

視察プログラムの活動成果を、フィールドワークとして実際に顔を合わせ地域に還元しようと考えましたが、まだまだ検討すべき点がたくさんあることに気づきました。次回は、より綿密に計画し、多くの方と語り合える実り多い原子力ティータイムにしたいと思います。



NPO フォーラム会場入口



資料台：創刊号とリーフレット配布



原子力ティータイムのひととき

主な活動の記録

①視察グループ

10月7日 防災訓練の個人評価レポート回収日。

視察グループで第三者評価報告書案とりまとめ

11月9日 定例会で第三者評価報告書案について議論

11月15日 代表佐藤・グループリーダー小宮山・池田の3名が東海村原子力対策課に防災訓練の第三者評価報告書を提出

11月16日 第一化学薬品(株)薬物動態研究所を見学。12月定例会に報告し、視察実施について議論。

原子燃料工業(株)視察報告書の公開に向けて作業継続中。

②会員拡大グループ

10月20日 原子力ティータイム

11月15日 企画打ち合わせ

12月8日 懇親会

・講座企画調査

③情報提供グループ

・広報誌企画会議 3回

・広報誌編集会議 7回

・広報誌印刷作業 1回

・広報誌折り・丁合作業 1回

・インターネット利用サポート 4名

④定例会

11月9日・12月9日・1月13日

「NPO しーきゅうぶ東海村」について

「東海村の環境と原子力安全について提言する会」は、2003 年より「原子力技術リスク^{シーキューブ}C³ 研究：社会との対話と協働のための社会実験」の住民参加プログラムとして活動しました。2005 年 2 月に実験が終了。任意団体「C³ 設立準備会」を経て特定非営利活動法人 (NPO) への組織変更を行いました。提言する会の会員は、NPO「HSE リスク・シーキューブ東海村支部」、通称「NPO しーきゅうぶ東海村」で活動を続けています。

シーキューブとは私たちが意識して活動している三つの C のことです。

地域社会－ Community (コミュニティ)

対話－ Communication (コミュニケーション)

協働－ Collaboration (コラボレーション)

同じ文字や数を 3 回掛け合わせると 3 乗で立方体になります。立方体は英語でキューブ。そこで私たちは三つの C を、シーキューブとよんでいます。さらに Risk (リスク) 情報を読み解くキーワードとして、

健康－ Health (ヘルス)

安全－ Safety (セーフティ)

環境－ Environment (エンバイロメント)

の頭文字 HSE を NPO 法人名に冠しました。

しーきゅうぶ東海村定例会予定

会場：東海村合同庁舎 304 号室

- ・ 2 月 17 日 (金) 午後 2 時
- ・ 3 月 17 日 (金) 午後 2 時
- ・ 4 月 14 日 (金) 午後 2 時
- ・ 5 月 12 日 (金) 午後 2 時

HSE リスク・シーキューブ 全体事務局

〒 201-8511 東京都狛江市岩戸北 2-11-1

財団法人電力中央研究所 社会経済研究所内

TEL 070-6568-8991 FAX 03-3480-3492

担当：土屋智子 tsuchiya@criepi.denken.or.jp

2005 年 12 月より所在地が上記に変わりました

しーきゅうぶ東海村・会員募集中

東海村とその周辺にお住まいの方、しーきゅうぶ東海村と一緒に活動してみませんか？日本のエネルギー事情、子どもたちの将来のこと、原子力事業や行政が少しずつ見えてきます。議論するって楽しい！

会員には次の 3 種類があります。

①正会員 (個人) 議決権あり

入会金 3000 円／年会費 5000 円

②活動会員 (個人) 議決権なし

入会金 3000 円／年会費 3000 円

③賛助会員 (個人・団体) 議決権なし

個人入会金 2000 円／年会費 1 口 2000 円

団体入会金 10000 円／年会費 1 口 50000 円

※入会についてのお問い合わせ、資料請求は下記全体事務局までお気軽にどうぞ。



2006 年 1 月定例会風景

編集後記 2005 年は、原子力と密接な関係のあるアインシュタインの特殊相対性理論が発表されてから 100 周年を記念した「世界物理年」でした。私たちは、発電などでは原子力の恩恵に浴していますが、反面 JCO 臨界事故などのようなリスクをも負っています。こたつにあたりながら、原子力の安全・安心な対処法の難しさをしみじみ考えています。[寺西]

次号発行は 2006 年 5 月の予定です